降誕日前夕　　恐れるな、インマヌエル　　２０２２．１２．２４．

礼拝堂の祭壇の前に、焼き物の人形が並んでいます。これらの人形はクリブと呼ばれますが、元々はイエス様が寝かされた飼い葉おけ。家畜がえさを食べるための入れ物がクリブです。
ここに並んだ人形たちが示している、クリスマス物語の登場人物たちにとって、イエス様の誕生はどんなものだったのか、今日は考えてみたいと思います。

クリスマスというイエス様の誕生を祝うことは、お祭り好きの現代人には、楽しいこと、うれしいこととして、定着しています。しかし、２０００年前の人々、クリスマスの誕生の場面で出てくる人々にとって、楽しいことだったでしょうか。

私は、むしろやっかいなこと、大変なことを背負うことになる大事件だったと思います。

ヨセフにしろ、マリアにしろ、思いがけない妊娠出産ということで、今までの安定した生活から、大変な状況が生まれてくる。そんな体験だったと想像されるのです。それは、彼らに語りかけた天使たちの言葉からもわかります。

ヨセフに語った言葉を見てみましょう。マタイ１章１８節からです。
「18:イエス・キリストの誕生の次第は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人が一緒になる前に、聖霊によって身ごもっていることが明らかになった。　19:夫ヨセフは正しい人であったので、マリアのことを表ざたにするのを望まず、ひそかに縁を切ろうと決心した。20:このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。21:マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。22:このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。23:「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。」

マリアの場合はどうでしょう。ルカ１章２８節からです。
『28:天使は、彼女のところに来て言った。「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」 29:マリアはこの言葉に戸惑い、いったいこの挨拶は何のことかと考え込んだ。30:すると、天使は言った。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた。　31:あなたは身ごもって男の子を産むが、その子をイエスと名付けなさい。」』

この二人への言葉に共通しているのは、先ず、『恐れるな』という言葉でしょう。そして、それを補足する意味があると思いますが、マタイの方は、預言者の言葉の引用として、「インマヌエル」、（神は我々と共におられる。）という言葉がありました。

それに対応する言葉としては、ルカの方は、「おめでとう、恵まれた方。主があなたと共におられる。」という天使の最初の呼びかけの言葉がそれに当たります。

この「恐れるな、神様があなたと共におられる。」というメッセージを、クリスマスの登場人物に当てはめてみましょう。

すぐに思いつくのは、羊飼いたちでしょう。ルカ２章８節からです。
『「8:その地方で羊飼いたちが野宿をしながら、夜通し羊の群れの番をしていた。9:すると、主の天使が近づき、主の栄光が周りを照らしたので、彼らは非常に恐れた。10:天使は言った。「恐れるな。わたしは、民全体に与えられる大きな喜びを告げる。11:今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになった。この方こそ主メシアである。」」

ここにも、第一声に「恐れるな」という言葉が出てきます。
ただ、ここで恐れるなと言うのは、ヨセフやマリアの立場の「恐れるな」とは、ちょっと意味が違うかもしれません。羊飼いたちの生活が変化を起こすというわけではありません。彼らの生活は、イエス様の誕生によって、変わるわけではありません。彼らは、羊の番をしていて、突然、主の栄光が周りを照らした、その明るさに驚いて、恐れたわけでしょう。

しかし「あなたがたのために救い主がお生まれになった。」という言葉が、クリスマスのメッセージを説明してくれています。

羊飼いというのは身分の低い存在でした。ユダヤ教の社会の中で、十分に律法を守れない、救いは自分たちには遠いもの、縁のないものと思っていたけど、そんな世間体を恐れることはない。神様があなたたちと共にいてくださる。あなたたちの仲間として、動物たちに囲まれた中に、メシアがお生まれになったのだ、ということでしょう。彼らは、イエス様に会いに行きました。そして、そのお話の最後は、

「羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。」と締めくくられています。

これからも、同じ貧しい生活が続くけど「神様が共におられるので、恐れることはない。」と思えたのです。というのは、イエス様の誕生した場面は、自分たち羊飼いの間で赤ちゃんが生まれた時と同じように、動物たちに囲まれての誕生だったからです。彼らはイエス様を本当に自分たちの仲間として受け入れることができたのでしょう。それで恐れることなくこれから生きて行ける勇気が与えられたのです。

さて、もう一つのグループ。東の方から旅をしてきた、占星術の学者たちにとっては、どうだったでしょうか。彼らは、ユダヤ人ではありません。東の国で、別の宗教。別の文化を持った人々です。ユダヤ人から見たら、救いからは遠い人々でした。そういう意味では、羊飼いと似たようなところもあります。

しかし、この人たちは宝物を持っている、お金持ちではあるでしょう。この人たちは星の研究をしていたので、おそらくハレー彗星か何か、特別な星を見つけて、新しい王様の誕生を悟ったのだろうと思います。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか。わたしたちは東方でその方の星を見たので、拝みに来たのです。」と言っています。

ユダヤ人の王様ですから、都エルサレムの王様が住んでいる宮殿だと思ったのでしょう。そんな立派な方には、立派な宝物をささげることがふさわしい、と思って、やってきたのです。

しかし、ヘロデ王のところで聞いた情報によると、エルサレムから南に８キロほど行った、昔ダビデ王が生まれ育ったベツレヘムだと分かるのです。そして、彼らが探し当てて、宝物をささげたのは、貧しい馬小屋に生まれた、小さな赤ちゃんだったのです。

立派な宮殿の暖かな部屋で寝ているのではなく、寒い馬小屋で寝ている、貧しい家庭の子どもを、ユダヤ人の王として、礼拝して宝物をささげた、ということでしょう。

この物語の最後は、「ところが、『ヘロデのところへ帰るな』と夢でお告げがあったので、別の道を通って自分たちの国へ帰って行った。」という言葉で終わっています。

ヘロデ王が、学者たちに「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。私も行って拝もう」と言っていた言葉を思い出したからです。ヘロデ王は、拝むどころか、イエス様を見つけ出して、殺してしまう、ということがわかったので、ヘロデ王に知らせないために別の道を帰ったのでしょう。

しかし、私はそれだけではないと思うのです。今までの、権力者に頭を下げる生き方をやめて、貧しい幼子をこそ、大切な王として尊重して行く、そんな生き方に、この学者たちは変わって行ったことを意味していると思います。

この学者たちのことを語った聖書の箇所には「恐れるな、主が共におられる」という言葉はありませんでしたが、「別の道を通って自分たちの国へ帰って行った」という言葉の中に、それが暗示されているのです。今までの生き方から違う生き方に変わったことを表すのに「別の道」と言ったのでしょう。しかし、このような、ヨセフ、マリア、羊飼い、学者たちが、「恐れるな、神様が共におられる」というメッセージを受け止めて、新しい生き方をしていった人々とは、全く違う、自分の立場に固執して、変化することを恐れていた人がいました。

学者たちに会ったあと、軍隊をベツレヘムに送った、ヘロデ王です。この人は、クリスマスの「恐れるな、主が共におられる」というメッセージを受け入れられなかった人です。そして、救い主を拒否して、自分の地位を守ることに必死だったのでした。

私たちがクリスマスを迎えるということは、自分に起こる新しい変化に対して、素直にそれを受け入れ、生きていく勇気を持つことです。これから、どんなことが起こるか、新しい年に向かって、不安があるかもしれませんが、「恐れるな、主が共におられる」というメッセージを受け入れて、歩みたいと思います。